

した、何が早いと云ふてこれ程早い物はない、見臺をボンと叩いたら、夫れでよいのでやすよつて。恰度明るる日の夕暮前に大阪船場のお宅へ着きました、大阪のお父つさんは大喜び「オウ甚平さんかよう間に合せて下さつた……オウおもよか、よう戻つて下さつたなア、ウム／＼お前も病氣ちやつたか、さうかな……アノこれ甚平さん、挨拶なんぞはマア／＼後の事ぢや、チツトモ早う連れて上つて俵に逢はして、やつて下され」
 「承知致しました」とおもよさんの手を取つて、甚平がイク間とへだたつた奥の間へ連れて行く、御親類は皆寄り合ふて、種々の相談をして居ります、甚平は「御免やすや、ヘエ御免々々」若旦那が寝てござる病室の襖をソロリと開けて、耻かしがつて居るおもよさんを若旦那のそばへ座らして、若旦那おもよどんが來はりました、と大きな聲で云ふたら、逢ひたい／＼と思ふて居るから、目をまわしたらいかんといふので、長い竹の節を抜いて、耳にあてがい、小さい聲で「若旦那おもよどんが來はりました……」と云ひますと、若旦那は、逢ひたい／＼と思め詰て居るおもよと云ふ聲で、眼を明きました、見るとおもよが側に座つて居るので「オウ、おもよか」「若旦那……」「逢ひたかつた」チヨン／＼チヨンと、芝居なら拍子木が鳴ると、これが廻り道具になるところでやすが、この邊の處は餘り詳しく云はん方が宜しい、餘り詳しくお話をして居りますと、松鶴の方が病氣になつて仕舞ひますから、此處はチヨツト飛ばして置くやうにいたします、「コレ／＼誰か來いよ、オーイ」「ヘイ／＼、お呼び遊ばしましたか」「アー久七か、御苦勞……」「オヤ、若

旦那さま、あなた様、御病氣は如何でござりまする」「アー病氣はモウ全然癒つて仕舞ふた、この通り達者になつたのや、併しながら永い間、御飯を食べんよつて、おもよも食べなんださうな、ふたり共、餘程おなか減つてな、どうもならんよつて、何ぞウント勢ひの付くやうに、何か美味い物を食べさしてお呉れ……さうやなア、先づ鰻を二十人前、生卵をば五十個ばかり持つて來て、鼈の吸ひ物に、肝臓圓の練藥をドシ／＼持つて來てお呉れ」「ヘイ、承知しました」といふので、此處へさして、溫かい御飯を焚いて、御馳走を揃へて持つて參りました、若旦那さんは、待ち焦れたおもよさんに、お給仕をして貰ふて、御飯を食べるのですから、お美味いの、お美味くないので、若旦那はウンと食べた「若旦那さん、何ぼでも上るのは宜しいが、病氣揚句に餘り、食べ過ぎると身體の爲に悪いわ、モウ三十八杯召上りました」「さうか、お前はどうか」と云はれた時に、おもよさんは女の事ですから、況して好きな男の前、極りが悪い、加減して少し小さいお茶碗で食べたので、それでも八十六杯……それからおふたりが美味しい物を食べて仲善う、ブラ／＼と一ヶ月程を暮します中には元々通り以上達者にお成り遊ばした。すると大阪の方のお父つさんは、この儘打棄つて置く譯には不可ンで、おもよを嫁に貰ふやうに、丹波の方へさして、話合ひに行て來て呉れと、甚平を頼んで掛合ひにやつたのです、スルト丹波の方は獨り娘ぢやによつて。嫁に上げる事は出來ん、さればと云ふて養子に貰ふ事も出來まいから、たとへ三日でも奉公した大切な御主人なれば、そりや御主人の仰しや